

共同討議 ナショナリズムの生成と現在

東京大学教授 高橋 哲哉
筑波大学助教授 中野目 徹

2003年12月6日、福島県立安積高等学校を会場として、「ナショナリズムの生成と現在 ―歴史認識と教育をめぐるディスカール―」をテーマとする研究会が開催された。この研究会は、福島県南地理歴史・公民科（社会科）研究会の各部会と、県北の同研究会における公民科の各部会が主催したもので、標記テーマに関連する講演をしていただくばかりでなく、講演者同士による共同討議を行うことによって、テーマの問題提起を深めることを目的とした。

今回、このようなテーマが選ばれた理由は、新たなナショナリズムが台頭している現在の状況を考えるために、ナショナリズムがどのように生まれ、そしてどのように語られてきたかを考察する必要が感じられたからである。そのために、ナショナリズムを歴史的に考察するとともに、現在の状況を検討するにふさわしい二人の研究者に講演を依頼した。一人は、ジャック・デリダなどの現代哲学研究を行うとともに、ショーア（ホロコースト）を中心とした歴史と記憶をめぐる社会哲学的研究や、日本と東アジアにおける歴史認識を検討している東京大学の高橋哲哉氏である。もう一人は、公文書を中心とした近代史料に関し、その様式と機能等の実証的研究を行うとともに、近代日本社会の編成原理を思想史の問題として解明するために、明六社や政教社といった思想結社に焦点をあてた研究を行っている筑波大学の中野目徹氏である。

両氏とも福島高校のOBで、福島県に縁があるということもあってか、多忙な中にもかかわらず、今回の提案に御快諾いただいた。以下は、この時の共同討議の一部を掲載したものである。（安積高等学校 小田賢二）

1. 錯綜するナショナリズム

中野目 近代日本におけるナショナリズムを定義することは、きわめて難しい問題と思われます。というのは、ナショナリズムを考える場合、テキストを分析して思想構造を解明するだけでは不十分で、運動としての側面も考えなければならないからです。例えば、丸山真男は、ナショナリズムをエモーショナルな概念で定義づけが難しいものであると述べています。しかし、丸山は、近代化のための必要条件として、ナショナリズムを明確に位置づけてもいます。

高橋 確かにナショナリズムという言葉は、かつてはポジティブな意味で使われていました。例えば、フランス革命のように、ナショナリズムは、封建制度から近代的な国民国家をつくるためのエネルギーとなりました。また、アジア・アフリカ地域などの植民地が宗主国から独立していく場合、それは解放のエネルギーとして機能しました。しかし、今日では、ナショナリズムが同質の国民をつくりだすとい

うことから、民族的なマイノリティなどといった少数者に対し、抑圧的に機能する側面が問題とされるようにもなっています。

中野目 ナショナリズムを民族意識という意味で取り上げることもできるでしょう。このような立場は、1950年代初めの歴史学研究会のグループの人たちにもみることができます。彼らはナショナリズムを近代日本における侵略戦争のエネルギー源として捉え、日本の近代化における必要悪としてみていました。それと同時に、「アメリカ帝国主義」に対抗する原理ともみなしていました。

高橋 私は、戦後日本におけるナショナリズムの動きは、三つの時期に分けられると考えています。第一期は、敗戦後の占領が終わる頃から1950年代までで、この時期には、逆コースといわれるように、「右翼」の復古的な動きがあらわれ、憲法改正などの動きもでてきましたが、それは実現しませんでした。むしろ、この時期を考える際に重要なのは「左翼」です。この時期は、左翼民族主義や反米民族主義といわれたように、「左翼」の中でも民族主義と

いうものが肯定的なイメージで語られていました。

次に、1960～80年代を第二期として捉えることができます。この時期は、経済成長に中心が置かれ、国家主義的な動きは後景に退いていました。一方、「左翼」の方でも、左翼民族主義と国家主義のつながりが指摘されたため、ナショナリズムはマイナスイメージへ転化しました。

第三期は90年代以降となりますが、これを「ネオナショナリズム」と捉えることができます。この時期、ヨーロッパでは東西の冷戦構造が崩壊しました。東アジアでは、それは完全に崩壊していませんが、その影響は及んできました。日本の戦争責任、植民地支配の責任が改めて問われることになったのも、この一連の流れにあると思われます。つまり、冷戦構造の下では声を上げることができなかった、アジアの戦争被害者の人たちが名乗り出てきたのです。そして、韓国の元従軍慰安婦や在日のB・C級戦犯だったような人たちから、日本の植民地支配の責任が改めて問われるようになり、戦後補償裁判が起こされました。これらのことは90年代の始めに起こりましたが、この状況に対する反発から、今日のナショナリズムをめぐる状況を理解できるのではないのでしょうか。

2. 近代日本におけるナショナリズム

中野目 きわめて今日的な課題であるナショナリズムを考察する場合、その生成期である明治中期の1890年前後において、それがどのような特色をもつものであったかという点から、この問題を考えていくことが有効だと思われます。その際には、近代日本の知識人の言説に着目することによって、問題点が明瞭になるのではないのでしょうか。

例えば、近代日本における知識人の出発点に位置づけられる福沢諭吉ですが、彼は明治7年（1874）にイギリス留学中の馬場辰猪に宛てた書簡の中で、明治維新の武力による騒動は終わったが、「マインドの騒動」は止んでいないと記しています。そして、これを鎮めるために、新しい国民意識を注入する必要性を述べています。このように、ナショナリズムとデモクラシーをどのように日本に定着させていくかということに福沢の課題があったといえます。陸羯南、内村鑑三や徳富蘇峰といった他の明治知識人の言説をみましても、ナショナリズムというものは、通有の概念であったと考えられますが、ここでは、

志賀重昂に焦点をあてて考えてみたいと思います。

志賀は、明治21年（1888）に政教社を結成し、国粹主義を唱えましたが、この「国粹」という言葉は、ナショナリティ（nationality）の訳語に他なりません。ここで注目すべきことは、志賀が、万世一系の天皇がしるしめす国ということに「国粹」の基軸を置いていないことです。実際、志賀は「世界の日本たるを知悉せざるが故に、徒らに富士山を以て三国一の大山」と称するような愛国心は、「孤立固立の観念」より由来したもので、本当の愛国心ではないと主張しています。

しかし、志賀は、明治33年（1900）には、自身に課せられた義務を「日本国民をして世界壇上の一員たらしむべき」こととし、そのためには、軍備拡張・市場獲得を進める積極主義的立場をとるべきであると述べています。このように、志賀重昂という一人のナショナリストの軌跡から、近代日本におけるナショナリズムが、日清戦争をへてどのように変質していったかを象徴的にみることができるのではないのでしょうか。

もちろん、近代日本におけるナショナリズムの変遷を考察する場合、それがどのように機能していったかを総体的に考える必要があります。そのためにも、当時の政権担当者の政策意図ばかりでなく、国民がどのように受け止めたのかといった、生成・定着のメカニズムを明らかにしなければなりません。その際に、これを解明する鍵となるのは、戦争と教育でしょう。先に、志賀が富士山を「三国一の大山」ではないと述べたといいましたが、富士山はナショナリズムの定着を図る装置として、教育の場で大きく機能したものの一つとなります。そして更に、この戦争と教育を統括するものとして、天皇の問題があげられるのではないのでしょうか。実際、「忠君愛国」が学校教育に導入されるのは、明治27年（1894）ころからということでもわかるように、日清戦争の過程で天皇の存在が非常に大きいものとなってきたのです。

高橋 今のお話で興味をもったのは、ナショナリズムが興隆してくると富士山のイメージも、シンボリックな操作の対象となってきたということです。私が問題にしている『心のノート』でも、「愛国心」の項目に富士山の絵が入っています。このことは決して偶然ではないでしょう。例えば、靖国神社のカレンダーでも富士山が使われています。また、国定



高橋哲哉氏

1956年福島県生まれ、1974年福島高校卒業、1983年東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了、現在東京大学教授。

著書に、『逆光のロゴス ―現代哲学のコンテクスト―』（未来社、1992年）、『記憶のエチカ ―戦争・哲学・アウシュヴィッツ―』（岩波書店、1995年）、『リーダー―脱構築―』（講談社、1998年）、『戦後責任論』（講談社、1999年）、『歴史／修正主義』（岩波書店、2001年）、『心』と戦争』（晶文社、2003年）、『証言のポリティクス』（未来社、2004年）、『〈物語〉の廃墟から』（影書房、2004年）

教科書の唱歌の中では富士山が「神の山」として歌われていますし、戦中のキリスト教会で歌われた興亜賛美歌の中でも、富士山が歌われています。このような富士山というシンボルが、ナショナリズムとどのように結びついてきたかは、きわめて重要な問題と思われる。

中野目 志賀重昂の『日本風景論』は、日清戦争下の明治27年に出されています。志賀は、日本の風景を称揚するためにこの本を書きましたが、時代背景を考えますと、きわめてナショナリスティックな性格をもつものといえます。そこで志賀は、「名山中の最名山」として富士山を特に称揚しています。志賀のこの本は、ある意味では、同じ時期に出された徳富蘇峰の『大日本膨張論』と対をなすものとも考えられます。つまり、志賀には、日本の膨張の基準点に富士山を据えるという意図があったと思われる。実際、日清戦後には、富士山というイメージが、植民地などにもシンボルとして輸出されるようになったのです。そして、近代日本のナショナリズムにおいて、最大のシンボルといえるのは、天皇ということになるのではないのでしょうか。

3. シンボルとしての天皇

高橋 ナショナリズムを形成しようとシンボルを動

員する場合、全てのものがシンボルになりうるわけではなく、その資源には限りがあると思われます。ですから、新たなシンボルが誕生していない現在では、天皇といったかつてのシンボルを、いわばサイクルしながら、機能させていると思われます。このように、現在の「ネオナショナリズム」は、天皇へ回帰しようとする復古的な面をもっています。

中野目 私は、大喪の礼と即位の礼が行われた当時、総理府（現在の内閣府）に所属していました。その意味で、天皇というシンボルを操作する現場を垣間見ることができました。その一つの例に、「即位の礼」の際に配られた式次第があります。これは単に紙片にすぎない式次第を何重もの紫の袱紗状のもので包んであります。このように、複雑な形式の集合体の一つ一つはがしていってみると、中は単なる式次第にすぎないというような仕組みが、「天皇制」の重要な一面だと思われます。近代日本においては、おそらく現在に至るまで、いわば中空構造の中心にすぎない天皇という存在を、ナショナリズムを語る場合のシンボルとしてきたのだと思われます。

高橋 確かに、天皇というシンボルは、戦争への協力といったような、人びとを動員するための装置としては、きわめて確実に機能しました。もちろん、それは教育という「上から」の操作によって、草の根レベルにまで浸透し、支持を得られてきたわけです。しかし、このことは、形は変わっているものの、現在でも行われているものです。例えば、『心のノート』は、現在、副教材の扱いですが、全ての児童に配られています。そして、今後、その使用がだんだんと義務化されてくると思われます。このように、公教育といった領域でシンボルが権力的に作動する場合、否応なくわれわれを襲い、それから逃れようがなくなります。

そして、現在、政府が国民の管理を強化する方向に動いていると思われます。それは、国旗国歌法や通信傍受法の成立、住民基本台帳の実施などにみることができます。このような政府側からの国家主義的な動きは、特に教育の分野で進行しています。その例としてあげられるのが、『心のノート』に見られる愛国心のメッセージであり、小学校6年生の社会科で、愛国心を評価する通信簿が各地で使われるようになったことなどです。まさに現在は、自然性を装ったソフトな形で、上からの愛国心教育が行われているのです。

4. ナショナリズム・教育・戦争

高橋 先に、90年代以降のナショナリズムを「ネオナショナリズム」といいましたが、これは、「下からのナショナリズム」が「上からのナショナリズム」を支えたものといえるのではないのでしょうか。その例は、自由主義史観にみられる日本の戦争犯罪を免罪化しようとする運動にみることができます。

これは、90年代後半の日本の世論をきわめてベーシックな所から変えていきました。そして、自虐史観という言葉は、この運動を通して一般化することになったのです。このように、現在は、「上からのナショナリズム」と「下からのナショナリズム」が共鳴し、日本社会の中でナショナリスティックな雰囲気支配的になっているのではないのでしょうか。

中野目 確かに、ナショナリズムを考える場合、知識人の言説は重要なファクターとなるものです。実際、近代日本における彼らの言論活動は、「臣民」に対し「上からの」ナショナリズムを注入することを競って補完してきたともいえます。そして、それらの活動が交錯する領域に、教育や戦争などがあつたと思われま

高橋 90年代には、元従軍慰安婦などの戦争被害者の人たちの発言に対して、先の戦争は間違っていなかったとして植民地支配を合理化する歴史観もでてきました。これは、一見、戦争の記憶が社会で議論されているように見えますが、実際は、被害者の発言が戦後半世紀になってからでてきたために、それに対応できず、反発だけが強くなったということが実態でしょう。このように、90年代以降の日本のナショナリズム状況は、「上からのナショナリズム」と「下からのナショナリズム」が連動し、戦争の記憶が後退したことによる国家主義への警戒が薄れたことによって位置づけられるでしょう。



中野目徹氏

1960年福島県生まれ、1979年福島高校卒業、1986年筑波大学大学院博士課程歴史人類学研究科中退、国立公文書館公文書研究職を経て、現在筑波大学助教授。著書に、『政教社の研究』（思文閣出版、1993年）、『明六雑誌』（岩波書店、1999年）、『近代史科学の射程—明治太政官文書研究序説—』（弘文堂、2000年）、『書生と官員—明治思想史点景—』（汲古書院、2002年）など。

そして、このナショナリズムが強くなっていく契機は、戦争とそれによる死者が出たときであると考えられます。国家は、国家のために殉じた死者を美化・顕彰し、そして、その後に続く人びとを動員しようとします。カントロピッチは、このような国家装置は、古代ギリシャからあるものの、近代になって非常に強力なものとなったと述べています。日本を考える場合、それは靖国神社にあたりますが、その日本の特殊性をはぎとれば、すべての近代国家に共通するものです。また、戦死者によって、「上からのナショナリズム」が喚起されるばかりでなく、その死に対する国民感情が励起されることによって、「下からのナショナリズム」も勃興することとなります。このような点から考えると、イラクなどの情勢を考えた場合、今後、日本のナショナリズムがどのように展開していくかは、大きな問題といえるでしょう。